

開放経済ニューケインジアンモデルを用いた政策効果の評価 —可能性と限界—

一橋大学 塩路 悦朗

本報告は新しい開放マクロ経済学(New Open Economy Macroeconomics、開放経済ニューケインジアン経済モデル)の可能性と限界について、小国開放経済モデルを用いて議論する。ここで利用するモデルは次のような特徴を有している。

- (1) 基本的には経済主体の異時点間の最適化に依拠したモデルである
- (2) 名目価格は粘着的である

これらの典型的なニューケインジアンの仮定に加えて、

- (3) 小国開放経済モデルであり外国との財と債券の取引が考慮される
- (4) 貿易財と非貿易財の区別を導入する
- (5) 為替変動の輸入物価へのパススルーが不完全である
- (6) 一部の家計は異時点間の最適化を行わず近視眼的に行動する(したがってリカードの等価定理が成立しない)
- (7) 労働市場の不完全性が考慮される(賃金は必ずしも市場均衡で決定されない)

このモデルにおける金融政策と財政政策の効果を検証することを通じて、政策効果を分析するためのツールとしてのこの種のモデルの可能性を論じる。その上で、その問題点についてより多くの時間を使って議論したい。この議論は①閉鎖経済のニューケインジアンモデルにも共通した論点と、②開放経済モデル特有の問題点に分けることができる。最後に、今後の研究が進むべき方向を考えたい。